

【様式】

令和6年度 学校マネジメントシート

学校名(飯野高等学校・全日制)

1 目指す姿

(1)目指す学校の姿		地域から愛され信頼される学校
(2)	育みたい資質・能力(育みたい生徒の姿)	○自分と他者の違いを認め、自分を大切にし、他者を思いやることのできる生徒 ○基礎基本の力を身に着け、信頼される社会人として地域に貢献できる生徒 ○専門的な知識、技能の習得を通じて、自由で豊かな表現力、創造力を発揮できる生徒
	【グラデュエーション・ポリシー】	
	ありたい教職員の姿	○生徒一人ひとりが自らの目標に向かって真剣に取り組むことができるよう、生徒のよき理解者となり、適切なサポートができる教職員 ○学習指導や生徒指導などの指導力向上をめざして、ともに学びあい学び続ける教職員

2 現状認識

(1)学校の価値を提供する相手とそこからの要求・期待	【生徒】 専門的な知識・技能の向上、楽しく充実した高校生活 【保護者】 卒業後に自立できる基礎力と専門性の涵養 【地域】 デザインや英語力を活かした活動など、本校ならではの社会貢献	
(2)連携する相手と連携するうえでの要望・期待	連携する相手からの要望・期待	連携する相手への要望・期待
	〈保護者〉 高校卒業後の進路実現 〈中学校〉 多様な生徒の受け入れ 〈地域〉 確かな学力と日本語力の育成	〈保護者〉 本校の教育に対する理解と学校の活動に対する協力 〈中学校〉 高校生活に適応できる生徒の育成 〈地域〉 企業等の積極的受け入れ
(3)前年度の学校関係者評価など	○コロナ禍もあけて学校行事にたくさん参加ができ、生徒や学校の様子を知ることができて良かった。子ども達は、のびのびと自由さを楽しんでいる姿を見て、とても良く感じた。 ○飯野高校は特色があり、たくさんの取組をしているので、ショッピングモール等に常時紹介できるような場所があればよい。 ○評価委員になってから、飯野高校へのイメージがとても良くなった。鈴鹿市、三重県の財産とだと感じている。学校の取組や生徒の活動などを情報発信して地域での認識を高めたい。積極的な学校の取組は、生徒の人生を変えるような成長に繋がり、地域と学校、生徒で好循環をつくりたい。 ○多数の組織や団体が、飯野高校を視察に来ている。将来日本が目指していかなければならない多文化共生を先取りして実践しているから注目をされているからだと思う。今後も受入れは大変だが、未来のために継続してほしい。 ○CLD生徒の就職状況については、以前から非正規雇用が少なくない問題点がある。今年度は、学校の取組のなかで学校斡旋による正規雇者が若干数増えた。 ○経済的な理由で進路実現ができない生徒もいるようなので、奨学金などの説明や指導を、より充実させてほしい。また、学びを深める経験として海外留学があるが、経済や為替の現状から金銭的な課題が問題となっている。	

		○今までのように「右へ倣え」でみんなが同じではなく、これからはそれぞれの個性が大切になると感じている。飯野高校での学びは、個性を伸ばす指導をしており、これからも充実させてほしい。 ○学校行事に参加する度に、生徒たちの努力と先生方の苦勞が伝わる。作品をつくる人だけでなく周りの人たちの協力もあり、いつも元気をもらっている。 ○卒業が近づき寂しく感じる。役員としての活動も楽しく、子どもも飯野高校に入学したことを満足しており、親としても嬉しい。
(4)現状と課題	教育活動	専門性の高い特色ある教育を通じて、成果、実績を積み重ねてきており、地域からの期待、信頼は厚い。また、CLD生徒への理解が進んでおり、日本語教育を始めとして組織的な支援ができています。一方、基礎学力や基本的生活習慣、また進路意識が十分でない生徒への支援が課題となっている。 さらに本校ならではの専門教育を充実させるとともに、学習指導と進路指導を効果的に結び付け、主体的な学びの充実に向けた体制づくりが必要である。
	学校運営等	令和4年度から学年担当を各学年1名増員し、学年主任1名と担任4名の計5名体制としたが、限りのある教員数の中、学年以外の分掌における負担が大きくなったため、令和6年度からは、学年主任を以前の担任兼任とすることとした。 こうしたなか、教職員に過度な負担を強いることなく効果的に業務を進めるため、ICT化を適切に進め、さらに分掌間の連携を強めるとともに、生徒の実態と合わない業務の廃止や簡素化、保護者等の学校への協力が欠かせない。また、教職員一人ひとりの指導力向上による学校全体の力の底上げが期待される。

3 中長期的な重点目標

教育活動 【カリキュラム・ポリシー】	教育課程の編成及び実施に関する方針 1 生徒一人ひとりの進路実現をめざし、基礎・基本の定着を図る 2 人とのつながりを大切にし、コミュニケーション能力の育成をめざした学習活動の推進 ①基本的生活習慣やマナーの定着 ②基礎学力の確実な定着 ③3年間を見通した系統的キャリア教育の推進 ④ICT教育の推進 ⑤CLD生徒支援教育の充実及び日本語教育の推進 ⑥多文化共生教育の充実及び命を大切にする教育の推進
学校運営等	①校内各部の連携による生徒支援の充実 ②教職員の指導力向上に向けた研修の推進 ③応用デザイン科と英語コミュニケーション科の交流推進 ④教職員のコンプライアンス意識の向上 ⑤保護者及び地域との連携協力の推進 ⑥総勤務時間の縮減及び職場の環境の充実

4 求める生徒像

入学時に期待される生徒の姿 【アドミッション・ポリシー】	(応用デザイン科) ○ 美術・デザイン表現に優れた資質をもつ者 ○ 将来の夢の実現に向けてチャレンジする向上心がある者 (英語コミュニケーション科) ○ 英語の学習に興味をもち、入学後も学習活動に意欲的である者 ○ 英語を生かした将来の夢の実現に向けてチャレンジする向上心がある者
--	--

5 本年度の行動計画と評価

(1)教育活動

教育活動に関する項目は、児童生徒を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「教育課程・学習指導」「キャリア教育(進路指導)」「生徒指導」「保健管理」など

また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」：定期的に進捗を管理する取組 「◎」：最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
キャリア教育の推進	(1) 進路意識向上のための取組 ①進路ガイダンスと事前事後指導による充実 【活動指標】ガイダンス機会、年間6回以上(各学年2回) 【成果指標】事後アンケートにおける意識向上70%以上 ②2年生時におけるインターンシップへの取組 【活動指標】地元事業所等でのインターンシップ 【成果指標】就職希望者数50%以上の参加	(1) ①1年5回、2年4回 3年2回 進路実現に向けての意識向上78% ②15事業所、31名参加 参加：73%	◎
	(2) 進路希望実現のための取組 ①自己開拓就職希望者への面談実施 【活動指標】我究と併せた適宜の面談(6・9・10月) 【成果指標】自己開拓から学校斡旋への変更率10%以上 ②校外模試と校内課外活動による実践力の向上 【活動指標】基礎力診断テスト及び大学・短大模試の積極的な受験 「我究」の年間20回以上の開講 【成果指標】進学希望者の進路決定率85%以上 学校斡旋の1次試験による合格率80%以上	(2) ①担任による面談 変更率0% ②基礎力診断テスト 実施：1年3回2年2回 校外模試：3年のべ52名、2年のべ93名、 1年のべ28名 我究年間22回実施 進路決定率87% 学校斡旋一次合格率：96%	
CLD生徒支援教育の充実	(1) 日本語能力による習熟度編成や支援員サポート 【活動指標】TTBJによる習熟度別クラス編成 一般授業への日本語支援員のサポート 【成果指標】TTBJの複数回数実施による点数の向上 (2) 日本語能力の向上 【活動指標】日本語能力試験の受験促進 【成果指標】第1言語が日本語ではない生徒のN3以上の合格率60% (3) 奨学金の申込など経済的に困難な生徒・家庭への支援 【活動指標】予約奨学金の手続きが滞りなく実施できる。 【成果指標】説明会、申請手続き指導を年間5回以上	(1) TTBJをTTVJに変更して2回実施 平均点(100点満点) 9月:67.7点、3月:69.2点 (2) N3以上受験者数(合格者数) 第1回 62(34) 54.8% 第2回 79(38) 48.1% 合計 141(72) 51.1% (3) 5回実施。別途個別での申請手続き指導を数回実施 (4) その他 CLD生徒対象インターンシップの実施17人参加(8社)	

生徒指導 の充実	(1) いじめの早期発見と対応 【活動指標】 学期に1回の面談と、事前アンケートの実施 (2) 身だしなみの指導と、規則正しい学校生活の確立 【活動指標】 ネクタイ・リボン着用の声かけ 毎朝 【成果指標】 ネクタイ・リボンの着用率 100% イエローカード発行枚数700枚以下 (令和5年度990枚)	(1) 面談、事前アンケートともに実施することができた。 (2) 毎朝、声掛けの実施ができた。 ・ネクタイリボン着用率 99.3% ・イエローカード発行 861枚	※
人権、多文化共生、 命の大切さ についての 学びの充実	(1) 人権についての理解と知識を深め、互いを尊重する意欲と態度を育むための人権学習の実施 【活動指標】 年間5回以上 (2) 人権学習や人権に関する取組等の発信 【活動指標】 「人権だより」の発行を年間3回以上 「多文化交流行事」「まなびの発表会」等の外部の人権関連行事への連携を年間3回以上 (3) 教員の人権に関する研修等の実施 【活動指標】 教職員研修またはフィールドワークを年間1回以上 教職員向け「人権だより」の配信を年間3回以上 【成果指標】 人権に対する意識や理解の深まりを感じた教職員数70%以上	(1) 各学年での学習・PTA共催人権講演会の実施等年間7回。 (2) たより年間3回(2回目より電子配信)。多文化交流会2回、発表会2回参加。 (3) 研修実施2回教職員向け「人権だより」の配信については、都度チャットツールを用いて情報共有する方法に置き換わってきています 意識の深まり74%	◎
基礎学力 の向上及 び健康意 識の確立	(1) 基礎学力の向上 【活動指標】 補習や各教科の宿題等を定期的実施 基礎学力向上(国語・数学・英語)の取組 【成果指標】 ・基礎学力、学習習慣が身についたと感じた生徒の割合70%以上 ・基礎力診断テストの成績変化 ① D3人数 国語・数学・英語とも20人減 ②GTZ上昇者 国語・数学・英語とも80人以上 (2) 健康の自己管理の確立 【活動指標】 日常からの体調管理と適切な栄養摂取 【成果指標】 毎朝の体調報告及び朝食をとる生徒の割合70%以上	(1) 基礎力診断テスト実施2年2回(4月1月)1年3回(4月9月1月) 基礎学力:72% 学習習慣:80% ①D3人数 【国語】4人減 【数学】5人減 【英語】8人増 ②GTZ上昇者 【国語】63人上昇 【数学】76人上昇 【英語】28人上昇 (2) 保健だより等を通じて、定期的に生徒に健康啓発を実施。 朝食をとる生徒の割合	

		1年：78.3% 2年：79.4% 3年：72.9%	
改善課題			
・就職における自己開拓希望生徒の人数を減少させるべく早期段階からのキャリア教育の充実 ・基礎学力の定着に向けた全校的な取り組みの構築 ・今後も幅広くさまざまな人権問題に取り組んでいく。 ・地域に対して開かれた学校となるため、地域のイベントや小学校との交流に積極的に取り組んでいる。今後も活動を維持しながら地域に対して周知していきたい。 ・英語コミュニケーション科においては、日本人生徒の割合が減少傾向にある。日本人生徒にとっても魅力のある学校作りを目指し、多文化共生実践校という特色を維持したい。			

(2)学校運営等

学校運営等に関する項目は、教職員や施設等を対象としたものとするのが望ましい。

(例)「組織運営」「研修(資質向上の取組)」「情報提供」「保護者・地域住民等との連携」など

また、評価項目・指標等を検討する際の視点は、学校の実態に応じて設定する。

【活動指標について】取組・活動の具体的な活動量や活動実績を指標にします。

【成果指標について】取組・活動による具体的な効果や成果等を指標にします。

【備考欄について】「※」：定期的に進捗を管理する取組 「◎」：最重点取組

項目	取組内容・指標	結果	備考
授業改善を図るための教職員の指導力向上	(1) 教員が相互に授業を見学し、気づいた点を交流する。 また、生徒や保護者、中学校教員等からのアンケートによる意見を共有する。以上により、授業力向上を図る。 【活動指標】 授業見学または授業公開を年間2回以上 年度末(12月実施)の生徒アンケート、授業公開時のアンケート実施 【成果指標】 生徒が授業を理解できている割合100% (2) 授業改善やICTに係る教職員研修会の実施 【活動指標】 研修会を年間1回以上 【成果指標】 ICTを活用して授業実践した教員の割合80%以上	(1) ●授業公開 6月(3日間、参観者34名(いずれも保護者))・11月(2日間、保護者9名・中学校教員1名・三重大学教職大学院関係者2名・学校関係者評価委員2名) 年2回(計5日間)実施 ・生徒の頑張りを応援したい、少人数によるサポートがありがたいという保護者の声が目立つ。先生方の努力も伝わっている。 ●生徒アンケート 12月実施(全学年対象) ・生徒が授業を理解できている割合=85.1% ・生徒からは、英語・数学・地歴公民の授業についていけているか不安という回答が目立つ(教科の先生方も可能な限り工夫はしてくださっている)。 ・家庭での学習時間が少ない状況がある(制作やスピーチ練習等に時間を充てている、家庭で学習できる環境にない生徒もいると思われる)。 (2)	

		●ICT 研修会:実施できず(年度当初計画したが担当者が病休に入り取りやめ) ●ICT を活用して授業実践した教員の割合=93.9%	
応用デザイン科と英語コミュニケーション科の交流	(1) 応用デザイン科と英語コミュニケーション科の交流授業、学校行事、卒業制作展、英語表現演習発表会等で交流をする。 【活動指標】 交流会を年間5回以上 【成果指標】 交流により、他学科への理解が深まったと感じる生徒の割合70%以上	(1) 交流会 7回 【アンケート他学科への理解度】100%	
地域への貢献活動と情報発信	(1) 鈴鹿ロータリークラブとの交流、連携 【活動指標】 地域の清掃など貢献活動の実施 【成果指標】 生徒が参加する行事を年間1回以上 (2) 積極的な中学校への学校紹介 【活動指標】 各中学校や市教委が開催する進路説明会へ教員だけでなく生徒とともに参加する。 【成果指標】 志願者数が前年度以上 (3) 主体的な異校種連携 【活動指標】 地域の小学校へ訪問して出前授業の実践 【成果指標】 受入校児童および本校参加生徒のアンケート満足度75%以上	(1) ①6月16日学校環境デーに生徒206名が参加 ②1月22日RC例会にて生徒英語スピーチ発表 (2) 従来の説明会だけでなく中学生への個別対応(6人) 【前期志願者昨年比】 応デ 83人(-8) 英コミ 75人(-9) (3) ・牧田小学校:3回 ・加佐登小学校:2回 ・小学生宿題ボランティア:長期休業中2回 【アンケート満足度】100% (4)その他 鈴鹿市国際交流協会主催「わいわい春まつり」実行委員として生徒参加 R6年度開催7名当日ボランティア17名 R7年度開催5名	
教職員や生徒、保護者への情報提供、情報発信	(1) 生徒、保護者の学校に対するニーズや信頼度等を把握するためのアンケートの実施 【活動指標】 アンケートを年間1回(12月実施) 【成果指標】 保護者の学校に対する信頼度80%以上 (2) 生徒、保護者への情報提供(マチコミメール・クラスルーム) 【活動指標】 マチコミメール等を年間40件以上 (3) HP、たより等による情報発信 【活動指標】 ①HPの新着情報を年間30件以上	(1) ・アンケート実施済み ・保護者信頼度89% (2) 23件 (3) ①41件	

	②「保健だより」を年間5回以上配付 ③「図書だより」を年間8回以上配付	②11回 ③11回	
職員の総勤務時間の短縮及び職場環境の整備	(1) 総勤務時間の短縮 【活動指標】 ①設定した日(年間12日)の定時に退校できた職員の割合80%以上 ②予定通り休養日(週1回以上)を実施できた部活動の割合100% ③放課後に開催して60分以内に終了した会議の割合70%以上 ④年間の学校閉校日を4日 【成果指標】 ①時間外労働時間の10%削減 (R5: 20.3 → 18.2時間/月) ②休暇取得日数の1日以上の増加 (R5: 21.4 → 23.0日/年) ③月80h超の時間外労働者延べ人数0人 ④月45h超の時間外労働者延べ人数0人 ⑤年360hを超える時間外労働者数0人 (2) 安心・安全な職場環境づくり 【活動指標】 「信頼される学校であるための行動計画」の周知および実施	(1) ①定時退校 76%→94% ②部活動 100% ③会議 69%→86% ④夏季冬季 計3日間 ①17.6H=13%減 ②24.2日=2.8日増 ③10人 ④40人 ⑤9人 (2) 学校信頼向上委員会からの年間計画の実施によって周知	
改善課題			
・新型コロナウイルスやインフルエンザなどの感染症対策と、生徒への基本的な生活習慣の啓発を引き続き行いたい。 ・学習時間が少ない、宿題が中学校と比べて減ったという回答の背景をつかむため、アンケートの質問項目に工夫が必要(その結果を面談等に活用することも可能)。今後の状況によっては、1学期末の追加実施も検討する。 ・ICTの活用に関しては、教員側が生徒へ指導する際に積極的に活用している一方、生徒に活用させている教員数が19.4%と低い。担当者として今後この点を意識し、取組を検討する。			

6 学校関係者評価

明らかになった改善課題と次への取組方向	・生徒・保護者アンケートの項目に、「朝ご飯を食べているか」、「あなたは家族に愛されているか」などの問いを入れることを検討してもよいのではないか。 ・アンケート集計をフォームで行うことは業務の軽減につながってよい。 ・制服の着方やみだしなみ指導を行ううえで、防寒対策とのかねあいも考えてほしい。 ・学校での防寒着の保管場所があるとよい。 ・日本語能力試験にチャレンジしてほしい。 ・自分で判断できる力を身に付けてほしい。 ・命を大切にする教育はこれまでどおり重視してほしい。
---------------------	--

7 次年度に向けた改善策

教育活動についての改善策	・生徒の主体性を意識しながら校則のあり方を考えていく。 ・CLD 生徒の進路実現のため、日本語能力試験の受験を引き続き促していく。 ・日本人生徒にとっても魅力のある学校づくりを目指し、多文化共生実践校という特色を維持していく。
学校運営についての改善策	・生徒のウェルビーイングな高校生活の実現に向け、的確な現状の把握を行っていく。 ・業務の効率化、削減に向け、ICT 化を一層推進していくとともに、優先順位をつけて業務に取り組むようにしていく。

